

## 立正大学熊谷図書館特別展 「古地図・絵図 田中啓爾コレクションの世界」の記録

鈴木厚志\*      鈴木純子\*\*      山崎秀夫\*\*\*  
根岸真理子\*\*\*      菊間葉子\*\*\*      田中典子\*\*\*

### 1. はじめに

本報告は、2011年11月上旬に立正大学熊谷キャンパスにおいて開催した立正大学熊谷図書館特別展「古地図・絵図 田中啓爾コレクションの世界」の出品目録と展示解説を収録した特別展の全記録である。この特別展開催のきっかけは、報告者の鈴木厚志が学内担当者となり、2010年7月3日に立正大学熊谷キャンパス内において開催した第103回地理学サロンであった。地理学サロンは、中村和郎駒澤大学名誉教授と堀信行奈良大学教授を中心とする研究会であり、大学教授、中学高校教師、出版関係者など約75名で構成されている。この時のテーマは「田中啓爾先生と日本近代地理学—田中啓爾文庫を訪ねて」であり、田中啓爾文庫の説明、田中先生と地理学教室、図書・古地図・フィールドノート・スケッチ帳等の見学、田中先生に関する講演（正井泰夫名誉教授）を行なった。参加者は約20名であった。

山崎秀夫熊谷学術情報サービス課長をはじめとする熊谷図書館は、地理学サロンの実施内容を、熊谷図書館の特別展として開催する可否を2010年12月頃から検討し、2011年1月には2011年度事業とするための予算化をし、同年2月には同年11月4日から10日にかけての特別展開催に向けた役割分担とスケジュールを確定させた。鈴木厚志は同展に付設する講演会を立正地理学会講演会、そして日本国際地図学会地方大会として位置付ける計画を立案し、両学会の協力が得られるよう依頼を進めた。こうした経緯により、この特別展は準備・開催をし、期間中延べ637名の入場者を迎えることができた。

本報告はこのような過程のもと開催した特別展の記録であり、その内容を可能な範囲で収録した。なお、第4章の展示解説中、執筆者名のない記載は、すべて分担執筆者である立正大学情報メディアセンター熊谷図書館員によるものである。

### 2. 特別展の概要

#### 2.1 催事

テーマ：「古地図・絵図 田中啓爾コレクションの世界」

期間：2011年11月4日（金）～10日（木）

会場：熊谷キャンパスゲートプラザ内

内容：①古地図・絵図の展示

・古地図・絵図の展示（第一会議室）

（江戸・長崎・横浜・道中図）

・田中啓爾先生の紹介（第三会議室）

（フィールドノート・授業用資料・著書・貴重本・コレクション）

②講演会（1101教室）

立正地理学会と日本国際地理学会による共催

③図録発行（62ページ・1,000部印刷）

主催：立正大学熊谷図書館

共催：立正地理学会・日本国際地図学会

協力：立正大学地球環境科学部地理学科

広報：学園誌、地理学科卒業生（埼玉・群馬・東京）、熊谷市報、近隣高校（30校）、県内大学短大図書館協議会（46校）、近隣の駅、近隣の生涯教育施設等

見学者延べ数：637名

#### 2.2 講演会と見学会

日時：11月5日（土）13時～16時30分

場所：熊谷キャンパスゲートプラザ1101教室

講演者：正井泰夫氏（立正大学名誉教授）

「立正の地理と田中啓爾先生」

鈴木純子氏（元国立国会図書館）

「田中啓爾文庫所蔵の絵図・地図」

見学会説明：清水靖夫氏（元立教高校教諭）・講演者・図書館課員・鈴木厚志氏（立正大学教授）

\* 立正大学地球環境科学部

\*\* 元国立国会図書館

\*\*\* 立正大学情報メディアセンター熊谷図書館

参加者数：82名

※講演会と見学会は、立正地理学会講演会、日本国際地  
図学会地方大会として位置づけ実施。学内責任者は鈴  
木厚志立正大学教授。

記念品：田中\*・根岸  
講演会：山崎

## 2. 3 予算

総計 1,487,000円（いずれも情報メディアセンター熊  
谷図書館予算）

内訳

通信運搬費(チラシとポスター等の送料)	12,000円
印刷製本費(チラシ3,000枚、ポスター200枚)	176,000円
〃(図録1,000部)	745,000円
〃(絵はがき6種×300枚)	102,000円
消耗品費(テーブルクロス・パネル等)	207,000円
人件費(展示室受付および監視)	100,000円
手数料報酬(図録原稿料および講師料他)	145,000円

## 2. 4 役割分担

\*はチーフ

図録作成	: 菊間*・山崎・根岸・田中
ちらし・ポスター	: 山崎
キャプション・説明文	: 菊間*・田中
広報	: 山崎
展示物陳列	: 田中*・根岸
アルバイト(手配・配置)	: 山崎

## 3. 古地図・絵図出品目録

長崎

- 長崎和蘭陀屋舗図 天明4 - 寛政10 (1784 - 98) 頃 手書彩色 1軸 66×120cm
- 出島間割之図 手書彩色 1軸 40×80cm
- 南蛮絵一異国船2と異人5名一 写 泥絵 1軸 117×38cm
- 長崎港之図 江戸後期 手書彩色 1軸 61×119cm
- 長崎居留場全図 慶応2 (1866) 鄰華堂 52×76cm
- 長崎港精図 入江英測量兼製図 明治25 (1892) 鶴野書店 53×78cm
- 改正長崎港内全図 小野左右輔編 明治18 (1855) 小野左右輔 48×88cm
- 長崎図 崎陽, 宮塚写 慶応3 (1867) 手書彩色 49×67cm
- 長崎阿蘭陀船出島絵巻 写 1巻 40×1063cm
- 長崎間見録 巻1 - 5 廣川獬著 寛政12 (1800) 岡田新治郎等 5冊
- 長崎土産 磯野信春(文齋)著・画 弘化4 (1847) 大和屋 1冊
- 長崎行程記 伝写 明和8 (1771) (原本: 長久保源五兵衛著・明和4 (1767) 成) 1冊
- 長崎記 1 - 3, 5 - 6 檜林写 5冊
- 長崎虫眼鏡 上・下巻 写 (原本: 江原某著・元禄16 (1703)) 1冊
- 長崎紀聞 乾・坤 複製 昭和5 (1930) 貴重図書影本刊行會 (原本: 田澤春房著・文化5 (1808) 筆) 2冊

横浜

- 東海道神奈川在横浜御貿易場 安政6 (1859) 29×41cm
- 横浜御開地明細之図 高島計之 安政6 (1859) 1軸 34×46cm + 16×22cm
- 御開港横浜之図 一川芳員写 万延元 - 文久元 (1860 - 61) 頃 東屋新吉(新栄堂)蔵 43×65cm
- 御開港横浜之全図 玉蘭斎橋本 万延元 (1860) 頃 丸屋徳造(宝善堂)蔵版 62×183cm
- 増補再刻御開港横浜之全図 玉蘭斎橋本 文久2 (1862) 頃 丸屋徳造(宝善堂)蔵版 62×181cm
- 再改横浜風景 五雲亭貞秀画 文久元 (1861) 頃 丸屋徳造, 丸屋甚八合梓 大判6枚続 37×150cm
- 大港横浜之図 橋本玉蘭斎貞秀画 慶応4 (1868) 頃 東屋新吉(新栄堂)蔵版 1軸 61×100cm
- 横浜明細全図 一川芳員画 慶応4 (1868) 再板 師岡屋伊兵衛 44×85cm
- 新鑄横浜全図 一隨時改刻一 五葉舎万寿老人製図, 吟香逸人校正 明治3 (1870) 小林屋銀次等 95×125cm
- 改正横浜分見地図 尾崎富五郎画 明治11 (1878) 尾崎富五郎(錦誠堂) 35×62cm + 15×15cm



図1 立正大学熊谷図書館特別展「古地図・絵図 田中啓爾コレクションの世界」ポスター

改良横浜明細全図 尾崎富五郎編 明治20(1887) 尾崎富五郎 48×69cm

横浜貿易場道案内 市川五郎右エ門写 江戸末期 1冊

横浜開港見聞誌 1-3編 橋本玉蘭齋編, 五雲亭貞秀画 文久2(1862) 序 3冊

珍事五力国横浜はなし 写本 南草庵松伯著 文久2(1862) 序 1冊

横浜土産 初編 玉蘭齋貞秀画 万延元(1860)頃 住吉屋政五郎(鳳来堂), 岐阜屋清七 1冊

よこはまみやげ 2篇 玉蘭齋貞秀画 万延元(1860)頃 住吉屋政五郎(鳳来堂), 岐阜屋清七 1冊

横浜土産3-5 玉蘭齋貞秀画 万延元-文久元(1860-61)頃 合1冊

横浜開港図会 芳員, 貞秀原画並画解, 素山等模写 大正2(1913) 横浜納礼会 1冊

## 江戸・東京

江戸切絵図 景山致恭, 戸松昌訓, 井上能知 嘉永2-安政2(1849-55) 尾張屋清七 22鋪

分間懷宝御江戸絵図 天保10(1839) 須原屋茂兵衛版 59×87cm+16×36cm

大江戸鳥瞰図 一宝齋国盛画 天保14-弘化4(1843-47)頃 37×53cm

東京名所一覽独案内 一曜齋国輝(二代目)画 明治2(1869) 蔦屋吉蔵 46×69cm

永福東京御絵図 明治4(1871)改正 西村屋与八原板, 吉田屋文三郎求板 75×90cm+13×34cm

永福東京御絵図 明治4(1871)改正 西村屋与八原板, 吉田屋文三郎求板 46×66cm

東京区分絵図 枝岩次郎編 明治8(1875) 丸山正助(宝山堂) 50×66cm

東京方角一覽地図 一一名名所独案内一 井上茂兵衛編 明治13(1880) 井上茂兵衛, 三宅半四郎 36×72cm

東京築地ホテル館表掛之図 一立齋広重(三代目) 明治2(1869)頃 若甚板 大判3枚続 36×72cm

東京築地鉄砲洲居留地中絵図 山田曜齋写 明治元(1868)頃 蔦屋吉蔵 37×51cm

安政見聞誌 上・中・下 一勇齋国芳画 安政2(1855)頃 3冊

安政見聞録 上・中・下 服部保徳著, 一梅齋芳晴等画 安政3(1856) 服部氏 3冊

再校江戸砂子温故名蹟誌 1-6巻 菊岡沾涼編, 丹治恒足軒再校, 牧冬涉訂正 明和9(1772) 藤木久市 8冊

江戸歳事記 1-5 斎藤月岑編, 長谷川雪旦画, 松齋雪堤補画 天保9(1838) 須原屋茂兵衛, 須原屋伊八 5冊

東都名所之図四十八景 後素園国直筆 江戸後期 1帖

四季遊覧東都名勝絵合 一立齋広重(初代)画 江戸後期 1冊

江戸遊覧花暦 巻1-4 岡山鳥編, 長谷川雪旦画 文政10(1827)刊, 天保8(1837) 印 須原屋茂兵衛(千鐘房), 伊八(青黎閣) 合 1冊

東京名所 一写真帳一 明治15-36(1882-1903)頃 1帖.

東京名所 熊沢喜太郎画 明治27(1894) 熊沢喜太郎 1帖

東京めいしよ図譜 東都花容月影譜 中村豊之助編 明治20(1887) 丸谷新八(九春堂) 1冊

## 道中図

東海道名所記 2 浅井了意著 万治3(1660) 1冊

東海道分間絵図 遠近道印著, 菱川師宣画 元禄3(1690) 2帖

難波より小倉に至る航路図 延宝(1673-81)頃 手書彩色 1帖

伊勢道中行程記 鳥飼醉雅 寛延4(1751) 1冊

浦辺順覧東海路之図 宝暦2(1752) 1帖

岐穂路安見絵図 桑楊編 宝暦6(1756) 万屋清兵衛 1冊

絵本伊勢路双六上・下 備中屋彦三郎著 明和6(1769) 吉文字屋市兵衛(大阪), 吉文字屋次郎兵衛(江戸) 2冊

米沢より江戸まで道中記 安永3-天明2(1774-82)頃 手書彩色 1冊

江戸より松江まで道中絵図 安永10(1781) 手書彩色 1帖

東海木曾両道中懷宝図鑑 天明6(1786) 須原屋茂兵衛 1冊

奥羽道中記 一鶴岡より江戸一 享和2-文政6(1802-23)頃 手書彩色 1冊

江戸より大坂まで道中絵図 文化6-8(1809-11)頃 手書彩色 1冊

日光道中絵図 一日光御成道一 平岩忠明摹 文政7(1824)改正 4帖

大日本道中行程細見記 一附 改正大日本方角指掌全図一 醉雅子 天保8(1837) 増刻 須原屋安兵衛等 1帖

富士見十三州輿地全図 秋山永年(墨仙)著 天保14(1843) 序 衆星堂蔵梓 148×171cm

加州下道中記 一從江戸至加州金澤下通山川駢路之図一 嘉永4(1851) 西村宗七 1帖

自東都西国筋旅中懷宝 結城榮(甘泉)画 嘉永5(1852)跋 1帖

行程図鑑 一從東武日本橋至京都三條橋一 橋本信正写 嘉永7(1854) 手書彩色 1冊

参宮上京道中一覽双六 広重(初代)製 安政4(1857) 蔦屋吉蔵梓 69×71cm

五海道中細見記 大城屋良助 安政5(1858) 須原屋茂兵衛等 1冊

海陸道中画譜 一大坂より萩まで一 橋本玉蘭齋画 元治元(1864) 序 菊舎幸三六(今幸堂)板 1冊

大日本道中細見記 河童葺主人校 元治元(1864) 金華堂蔵板 34×284cm

新版東海道五十三次行列双六 玉蘭齋貞秀画, 朝倉万次郎彫 慶応元(1865) 辻岡屋文助寿梓 68×58cm

陸奥出羽国郡行程全図 玉蘭齋画製 慶応3(1867) 163×70cm

江戸より長崎まで名所旧跡道中図 江戸後期 手書彩色 2巻 21×454cm, 21×420cm

江戸より長崎まで道中図 江戸末期 手書彩色 1巻 29×816cm

五街道々中絵図 江戸末期 手書彩色 38×185cm

※記載順 資料名 作者 年代 出版 その他の事項（形態・大きさ等）

※書誌事項は立正大学図書館編『田中啓爾文庫目録』による。年代・装丁等、一部現状に即して修正した。

## 4. 展示解説

### 4. 1 長崎

長崎湾奥の好位置にある長崎は、戦国時代末期にポルトガル人の開港地となり、その後の鎖国時代にもオランダ、中国との交易が認められて、国外に開かれた小さな窓としての、独自の文化が育まれてきました。人びとの関心も高く、三都に次ぐ多数の町絵図が板行され、紅毛（オランダ）人の風俗や港の風景などを描く「長崎絵」「長崎版画」などと呼ばれる独特の浮世絵が数多く刷られました。挿絵を中心とする地誌、紀行なども豊富です。展示の古地図は幕末期から明治前期のもので、慶応3年（1867）の手書き『長崎図』には居留地が描かれています。『長崎居留場全図』はその居留地内部の地割を平面図で描き、外側は鳥瞰図風にと描き分けられています。明治期の地図からは出島と居留地周辺の埋め立てによる変化が読みとれます。

扇型の出島は、ポルトガル人の居留地として寛永20年（1643）に造成され、ポルトガル人の追放後、平戸から移されたオランダ人の居留地となりました。出島の施設配置を描く『長崎阿蘭陀屋舗図』、数ある出島図中でも三指に入る優品とされています。[長崎阿蘭陀船出島絵巻]はパリ国立博物館所蔵『蛮館図』の下絵で、単色ながら出島内の生活を描く傑作であり、パリ図にない図や情報も含む、コレクション中の代表的資料です。（鈴木純子）

#### 長崎和蘭陀屋舗図

作者不明 天明4 - 寛政10（1784 - 98） 手書図

寛政10年3月（1798）の出島大火以前の図。出島のオランダ商館の施設配置を描いている。国内外にある同類図の中でも品格の高さでは逸品であると言われている。

#### 出島間割之図

作者・年代 不明 手書図

寛政10年3月（1798）の出島大火以前の図。建家（華色）、蔵（暮色）とに、色分けしてある。図面の中央から右側は、商館長の住宅、商館員の宿舎、通詞・乙名など

日本側の役人の建物である。左側は、オランダ人の散歩区域や菜園・花畑となっており、多くの外国の草花が植えられていた。

#### 南蛮絵一異国船2と異人5名一

作者・年代 不明 極彩色（泥絵）

幕末頃に想像で描かれた、南蛮交易の泥絵である。泥絵は、幕末から明治の頃に泥絵具で描かれた庶民的な日本画で、遠近法などの洋画の技法で描かれている。

#### 長崎港之図

作者不明 江戸後期 手書図

文化5年（1808）イギリス軍艦がオランダの商権を奪うため長崎に入港したフェートン号事件以後、長崎には台場が増設された。図中に「石火矢臺」とあるのが台場である。この図には台場や、番所など主要施設のほか、岬や小島などの距離や水深が描かれている。

#### 長崎居留場全図

作者不明 慶応2（1866） 木版

居留地内部の地割を平面図で描き、外側は鳥瞰図風に描き分けられている。また居留地の等級が色分けされており、黄：上等、青：中等、赤：下等となっている。上等地は海岸付近の土地、中等地はその背後の内陸部、下等地は山手になる。海に面した出島や大浦は上等地となっている。

#### 長崎港精図

入江英測量兼製図 明治25（1892） 石版

地名等がローマ字表記になっているので、海外向けに発行された地図と思われる。明治18年（1885）以降行われた第一次工事により、中央の出島橋の消滅や東側の出島新橋が廃止され陸続きとなるなど、出島周辺が変貌をとげていった。

#### 改正長崎港内全図

小野左右輔編 明治18（1885） 銅板

長崎市内の官舎、神社、寺地がそれぞれの色の枠で囲ってある。また、明治2年（1869）に出島の東側に新しく架けられた出島新橋、新大橋、梅ヶ崎橋が描かれている。これにより出島は、新地町、梅ヶ崎町を経て大浦海岸の居留地へと連結された。

#### 長崎図

**崎陽、宮塚写 慶応3 (1867) 手書図**

安政5年(1858)の日米修好通商条約締結により、長崎も開港となり、安政6年(1859)には、外国人居留地の建設が開始された。同年、218年間続いた出島のオランダ商館は廃止され、慶応2年(1866)に外国人居留地に編入された。この図では出島の東南、大浦などの一帯に外国人居留地が描かれている。

**長崎阿蘭陀船出島絵巻**

作者・年代 不明

オランダ船の入港、輸入品の荷卸し、銅の計量、宴会や玉突の光景、厨房や牛豚屠殺の有様、ポンプで草花に灌水する所など出島におけるオランダ人の生活を白描で描いている。同じ構図の彩色画「蛮館図」がパリ国立図書館に収蔵されている。

**長崎聞見録 巻1-5**

廣川獬著 寛政12(1800) 木版

著者は京都の医者で、医術のほか動植物にも造詣が深かった。寛政年間(1790年頃)に2度、合わせて6年間長崎に滞留し、その間長崎で見聞したことを詳細に書き留めている。著者の興味は多岐にわたっており、長崎の人々の風俗だけでなく、オランダや中国に関するさまざまな事柄、珍獣怪魚奇魚介、その他草木果実、あるいは什器など、分かりやすい挿絵で巧みに示されている。

**長崎土産**

磯野信春(文齋)著・画 弘化4(1847) 木版

磯野文齋は江戸時代後期の浮世絵師。江戸で浮世絵を学び、長崎で版元を営みながら長崎絵を描いた。この本には、長崎の名勝や、オランダ人・唐人の風俗などが描かれている。

**長崎行程記**

長久保源五兵衛著 明和8(1771), 原本: 明和4(1767) 成

著者は常陸国の農民出身の地理学者で、江戸時代後期の世界地図作成者として有名になった。この本は常陸国の漁師が難破して安南(現在のベトナム)に漂着し、長崎に送還されたのを迎えに行った折の旅日記である。内容は、紀行文の概念をはるかに越え、地理、習俗、故実、古跡、神社、仏閣、その由来など多岐にわたっている。

**長崎記 1-3, 5-6**

榎林写 書写年不明

長崎通詞榎林(ならばやし)の記した覚書である。当時の通詞は世襲制であり、長崎奉行の下で働く公務員であった。職務内容は通訳だけでなく、翻訳は無論のこと、外国船来航にあたっての業務、貿易に関わる業務など多岐にわたっていた。

**長崎虫眼鏡 上・下巻**

江原某著 原本: 元禄16(1703)

長崎に来遊した江原某が見聞し、調査したことを書きしるしたもの。大阪で出版された。元禄年間に書かれこの種のものとしては古い方に属する。内容は、長崎興建に始まり、奉行・官公庁関係・社寺町・唐・オランダ等であり、出島などの挿絵も描かれている。

**長崎紀聞 乾・坤**

田澤春房著 昭和5(1930), 原本: 文化5(1808) 筆 木版刷彩

長崎の名勝やオランダ人、唐人の風俗を絵画にし、簡単な解説を加えている。乾・坤2冊より成る。乾巻は主として長崎港内や付近の図と出島のオランダ商館に関するものを収め、坤巻には唐人屋敷に関するものを収めている。

**4. 2 横浜**

安政6年の開港から明治初年にかけての横浜の古地図を中心に、開港場横浜の風景、外国人の姿や珍しい風物をつたえる案内記などを集めました。

同じ開港場である長崎が古くからの港町であり、鎖国中にも外国との窓口の機能を保ってきたのに対し、横浜は開国にともなって造成された全くの新開地であることを特色としています。条約では神奈川を開港地としましたが、交通の要衝であり江戸にも直結する神奈川への外国人の出入りを警戒した幕府が開港場としたのは、神奈川宿とは入江を隔てた対岸の砂州に位置した横浜村でした。寒村とはいえそれまでの住民を移転させ、棧橋や居留地を含む町並みが造成されました。砂州の内側の埋め立てが進み、山手にも建物ができて町が変化、拡大して行く経過が地図からよくわかります。横浜の町を鳥瞰図風に描く古地図の多くは関内を正面から見る東北からの視点で描かれ、北が上でなくほぼ西南が上になっています。

明治初期ごろまでのこれらの木版多色刷の地図は、風



写真1 横浜の古地図・絵図

景や外国人などを描く錦絵とともに横浜絵、横浜浮世絵などと呼ばれています。開港場はほぼ正確に描かれていますが、対岸にあたる神奈川宿一帯は絵画的な構図としてかなり変型して描かれています。（鈴木純子）

#### 東海道神奈川在横浜 御貿易場

作者不明 安政6（1859）木版

開港直前の建設途中の横浜の町並を紹介する瓦版。上段右は当時の役人の名前、上段左は日本人町に出店予定の商人リストが記されている。開港の前年、出店希望者の受付が始まり、一攫千金を狙う商人たちが我こそはと申しこんだという。

#### 横浜御開地明細之図

高島計之 安政6（1859）木版

開港した年の様子か。外国人居留地を圧縮し、日本人町を大きく描いている。2本の波止場の上に運上所があり、その先の道をいくと、田の中には11月に開業予定の「遊女屋場所」が描かれる。中央には先が二つに割れた砂州があり、象ガ鼻と呼ばれていた。これはペリーが残した日本最初の海図にも明記され、横浜村の州干湊の名残である。森に囲まれた弁天社は砂地に松並木が続く景勝地として開港前から知られ、開港後は門前の弁天通に茶屋などが並んだ。

#### 御開港横浜之図

一川芳員写 万延元－文久元（1860－61）頃 木版

中央の波止場を境に、右側（白色の箇所）が日本人町。左側（オレンジ色の箇所）が外国人居留地。波止場の側には税関にあたる「御運所」が置かれている（現在の神奈川県庁付近）。横浜村の住人は万延元年（1860）に右の

山手の麓に移住させられ、現在の元町が形成された。元町と山手の間に堀川が開削されると、居留地は出島のように水路で囲まれた。水路にかけられた橋には関門が置かれ、その内側は「関内」外側は「関外」と呼ばれた。

#### 御開港横浜之全図

玉蘭齋橋本 万延元（1860）頃 木版

増補再刻 御開港横浜之全図 玉蘭齋橋本 文久2（1862）頃 木版

左には遠く房総半島から、右上には富士山、図の中央にはアメリカイギリスなどの各国の船が浮かぶ横浜の開港地。よく見ると、町並や東海道には人々が小さく蟻のように描かれている。この図を描いたのは、50人ほどいた横浜浮世絵師の第一人者、「玉蘭齋橋本」またの名を五雲亭貞秀である。彼は数度に渡り富士登山を経験しており、その経験が、まるで鳥が空から眺めたような作品につながっている。彼の緻密な版画は、彫師泣かせでもあったという。横浜が発展するに従い、改定が加えられ、「増補再刻 後開港横浜之全図」が刊行される。2つの作品を見比べると、船や建物の数が増え、煙突から煙が上がり、開港した横浜が日々発展していく様子がうかがえる。

#### 再改横浜風景

五雲亭貞秀画 文久元（1861）頃 木版

一番左には外国人墓地や、ワラ屋根の横浜元村が描かれている。そこから右側にいくに従い、大きく描かれているのが外国人居留地。小さく連なっているのが、日本人町。通りに面して数百軒余りの商店があった。図の中央、田の真ん中には、幕府の主導で作られた港崎遊郭がある。岩亀楼や五十楼を筆頭に300人を超す遊女がおり、昼間は一般庶民が見物に訪れるほどの名所となった。

#### 大港横浜之図

橋本玉蘭齋貞秀画図 慶応4（1868）頃 木版

中央の波止場の左側が、開港当時の図と比べると象の鼻のように曲がっている。これは慶応2年（1866）の大火の翌年、復興にあたり北風に強い波止場が求められたため、弓なりに延長された。現在も「象の鼻パーク」として復元され、親しまれている。また、この火災で居留地の中心にあった港崎遊郭も焦土となり、この図では灰色の荒れた土地になっている。跡地は明治に入り公園が整備され、現在は横浜スタジアムとして使用されている。

**横浜明細全図**

一川芳員写 慶応4 (1868) 再板 木版

幕末最終期の横浜。この年の9月より明治となる。慶応2年の大火後、近代都市計画に基づき町が整備されていく。波止場の上の道は、防災を意識した日本初の近代道路となる(現日本大通り)。波止場の右の日本人町は丁名制だが、左の居留地には地番が付けられ、外国商人たちはこの地域内でのみ居住や営業が認められた。現在の中華街のある山下町の番地には当時の地番がほぼ残っている(111番から始まる斜めの道のあたりが中華街)。

**新鐫横浜全図— 随時改刻—**

五葉舎萬寿老人製図, 吟香逸人校正 明治3 (1870) 木版

図の左下に「在港外国人名抄録」が記され、医師ヘボン(ヘボン式ローマ字の考案者)の名もある。作者は、明治前期の横浜絵地図で代表的な尾崎富五郎(五葉舎万寿老人)。校正は「麗子像」で有名な岸田劉生の父、岸田吟香。吟香は、ヘボンに目の治療を受け、その親交から後に日本初の和英辞典を刊行する。図の右下には、野毛の先に鉄道用地が造成されている。鉄道の開通はこの2年後。

**改正横浜分見地図**

尾崎富五郎図画 明治11 (1878) 木版

明治5年(1872)に新橋・横浜間(現桜木町駅)の鉄道が開業し、図には時刻表や運賃表も表記されている。それまで馬車で4時間かかったところを鉄道は53分でヒトやモノを運び、人々の暮らしを変えていった。明治8年(1875)、かつての遊郭の跡地には外国人と日本人の共同公園である「彼我公園(ひがこうえん)」が出来た(現在の横浜公園)。左上の根岸には、外国人たちの要望で作られた日本初の洋式競馬場がある。

**改良横浜明細全図**

尾崎富五郎編 明治20 (1887) 銅版

明治10年代から20年代にかけて、横浜の名所入り地図が流行した。横浜停車場、灯台局などが名所として描かれている。また、「MAP of YOKOHAMA」の左付近には、居留地町名表が記されている。開港当初は外国人居留地には地番のみだったが、明治12年に町名が付けられた。なぜ外国人になじみのない日本各地の藩名や地名がつけられたのかは不明だが、今も横浜には「加賀町警察署」「薩摩町バス停」などが残る。

**横浜貿易場道案内**

市川五郎右エ門写 江戸末期

開港場内にできた日本人町の商店の場所などが記されている。店舗の敷地は、間口五間(約9メートル)から七間(約13メートル)、奥に細長い短冊形で、通りには商店が数百軒並んでいた。

**横浜開港見聞誌 1-3編**

橋本玉蘭齋編, 五雲亭貞秀画 文久2 (1862) 序 木版

浮世絵師でもありすぐれたルポライターでもあった貞秀が、開港して4年目の横浜の様子を記した案内記。貞秀が見聞きした外国人の風俗、商館のたたずまい、交易の仕方などを描いている。貞秀は文章の中で「姿や言葉が異なれど、心は同じ」と諸外国の人々を表現している。

**珍事五カ国横浜はなし**

南草庵松伯著 文久2 (1862) 序 写

居留地の外国人の生活の様子が書かれている。但し、実際に外国人宅を取材するのは困難で、その頃既にある外国の新聞や雑誌などを参考に、多少大げさに文章が表現されていたこともあった。

**横浜土産**

玉蘭齋貞秀画 万延元-文久元 (1860-61) 頃 木版刷彩

開港の翌年から2年間に出版された5冊の横浜ガイドブック。貞秀が描いた100点の絵と、名所を詠んだ歌も随所に添えられている。横浜が開港し、新たな観光地として話題の町になるとこのような案内書が人気となった。

**横浜開港図会**

芳員, 貞秀原画並畫解, 素山等模写 大正2 (1913) 木版刷彩

江戸時代の版を、大正になって愛好家たちが復元したものか。パンを焼く図や、アイロンや洗濯をする人など、当時横浜に外国人がもたらしたものが描かれている。

**ジャパン・パンチ**

チャールズ・ワグマン 文久2-明治20 (1862-87)

開国まもない横浜で25年間に渡り外国人向けに発行された、日本初の風刺漫画雑誌。途中、生麦事件や薩英戦争等が勃発した期間は休刊した。ミスターパンチとして知られるワグマンは、この雑誌のオーナー兼、漫画兼、執筆兼、出版者であった。横浜外国人居留地の生活を

ここまで詳細に描写したものは他になく、当時の日本の歴史を知ることができる貴重な資料である。

#### 4. 3 江戸・東京

江戸図は江戸時代前期から数多く出版されてきましたが、今回は江戸から東京へと移行する幕末期から明治初期にかけての比較的短い期間の地図を展示しています。50年足らずのわずかな間の変化や、一枚図、切絵図、鳥瞰図それぞれの表現などが着眼点です。一枚図は江戸図のなかでは小型のものですが、それでも携行するには大きく、必要な行動範囲のみをとり出して使える切絵図が重宝されました。一軸として対照される江戸・東京の鳥瞰図には旧蔵者田中啓爾氏の視線がうかがわれます。築地鉄砲洲の絵図と、ホテル館の錦絵はこの時代を象徴しています。ホテル館の錦絵は数多く、文明開化の中心が横浜から東京へと移る明治初期の、鉄道や新しい洋風建築などを扱った錦絵とともに開化絵と呼ばれ、浮世の実況を伝える情報源として広く人気を博しました。

地誌類は当時の市井の人びとの生活風俗を反映しています。上記の開化絵に寄せられた多大な関心もこうしたなかに根ざしていたといえるでしょう。『再校江戸砂子』は少し前の時代の代表的地誌ですが、挿絵は副次的です。『江戸名所図会』で名高い長谷川雪旦の描く『江戸遊覧花暦』『江戸歳時記』は俯瞰的構図のリアルな挿絵が雄弁です。幕末期の大災害「安政地震」の関係資料も加えました。（鈴木純子）

#### 江戸切絵図（尾張屋板）

景山致恭、戸松昌訓、井上能知 嘉永2-安政2（1849-55）木版

江戸の町は広がったので、部分部分を拡大した版画地図が重宝された。彩色して絵のように描いた部分図で、隣の地図とはうまく連がらないことが多いが、大名や旗本、組屋敷、寺社、町人町の名前が書かれているので、案内地図として役に立った。

#### 分間懐宝御江戸絵図

作者不明 天保10（1839）木版

江戸有数の版元であった須原屋から刊行された江戸図。懐宝とは、携帯用の意。「一分廿間乃積り」とあり、一万二千分の一の縮尺であることがわかる。図中は、寺社や船などは具体的に描かれ、道路の黄色、水の青など色分けの工夫もされている。

#### 大江戸鳥瞰図

一宝斎国盛画 天保14-弘化4（1843-47）頃 木版

江戸後期になると、町全体を一望のもとに見渡した景観が数多く描かれた。隅田川の東岸、向島あたりの上空から西に向かって俯瞰し、真正面に富士山が見える印象的な構図は、江戸鳥瞰図のスタンダードと言える。

#### 東京名所一覧独案内

一曜斎国輝（二代目）画図 明治2（1869）頃 木版

江戸城を中心に現在の山手線内側と下町を描いた絵図。富士山を描かずに、明治初期の東京市街地を鳥瞰図的に表現している。江戸時代から続く名所に加え、築地の外国人居留地やホテル館など新名所も見える。

#### 永福東京御絵図

作者不明 明治4（1871）改正 木版

元治元年（1864）の原版に明治4年時点の修正を加えたもの。明治2年（1869）東京奠都により江戸城は皇居となるが、周辺に外務省、司法省、兵部省などの政府機関と大名屋敷が混在し、江戸から東京への時代の移り変わりが感じられる。

#### 永福東京御絵図

作者不明 明治4（1871）改正 木版

明治4年の廃藩置県で、新東京府は大区小区制に改正され、6大区97小区が設定された。本図には新区分の線が加えられている。また、緑色の部分に「クハチャ」という文字が見えるのは、大名がいなくなった武家屋敷を桑茶畑に変える「桑茶政策」の影響。

#### 東京区分絵図

枝岩次郎編 明治8（1875）銅版

明治7年（1874）11大区制への再編後の東京地図。従来の6大区に加え、第7大区～11大区が設置された。旧蔵者の書き込みにある明治11年（1878）には、郡区町村編成法に基づき、東京府は15区制となる。

#### 東京方角一覧地図 一名 名所独案内

井上茂兵衛編 明治13（1880）銅版

四方に名所案内を配した絵図。皇居を中心に東京の町を一望する構図。名所の中には、洋風になった日本橋や新橋・高輪の鉄道などが描かれ、明治という新時代・文明開化の様子が伝わる。



**東京築地ホテル館表掛之図**

一立斎広重(三代目) 明治2(1869)頃

築地ホテル館は、外国人専用の宿泊兼貿易・商談施設として、明治元年(1868)に竣工し、その和洋折衷の姿は東京の新名所として評判となり、文明開化のシンボルとして錦絵に多く描かれた。ホテルは経営難で明治4年に閉鎖、翌年の銀座大火で焼失した。

**東京府築地鉄砲洲居留地中絵図**

山田曜斎写図 明治元(1868)頃 木版

安政時代に締結された日米修好通商条約に基づき、築地に外国人居留地が設けられた。本図の右上には、築地ホテル館や運上所(日の丸の場所、後の東京税関)、外国人居留地があり、左下には濠を廻らせた新嶋原遊郭が見える。

**安政見聞誌 上, 中, 下**

一勇斎国芳画 安政2(1855)頃 木版

安政大地震は、江戸直下型地震の性質上、江戸ならびに周辺はもろに震災をこうむり、ひどい人的・物的損害をうけた。『安政見聞誌』は地震に続いて起こった火災や破損の被害状況を、地区別に詳細に記している。図は浅草寺五重塔の九輪が曲がった様子。

**安政見聞録 上, 中, 下**

服部保徳著, 一梅斎芳晴等画 安政3(1856) 木版

安政2年10月2日に起こった江戸の大地震の実話集。「孝婦が非命に死んだ話」などの悲話や美談、また「両親を見捨てて被災した話」など教訓めいた話が多い。未曾有の大災害に遭ったときこそ忠孝義を重んじることの大切さを説いている。

**再校 江戸砂子温故名跡誌 1-6巻**

菊岡沾涼編, 丹治恒足軒再校, 牧冬涉訂正 明和9(1772) 木版

菊岡沾涼が著した地誌。江戸の名所旧跡を各地域ごとに記し、江戸市中の分割図も挿入されている。地誌の参照が目的の略図で、情報量も少なく分割も大まかだが、後世の分割図へ通じる内容をもつ。

**江戸歳事記 1-5**

斎藤月岑編, 長谷川雪旦画, 松斎雪堤補画 天保9(1838) 木版

「東都歳時記」ともいう。江戸の年中行事が春夏秋冬季節に沿って描かれている。図の「初春路上図」は、日本

橋南詰から見た賑やかな正月風景で、店先には注連縄飾り、橋の上には正月に初登城する大名行列、遠くの空にはたくさんの凧があがっている。

**東都名所之図四十八景**

後素園国直筆 江戸後期 自筆

歌川国直(二代目と思われる)による素描下絵帖。梅屋敷、洲崎弁天、亀井戸、愛宕、増上寺など、江戸に知られた名所のスケッチであるが、景色よりも人物の滑稽さが楽しい。

**四季遊覧東都名勝絵合**

一立斎広重(初代)画 江戸後期 木版

江戸の名所・名物を描いた納札(のうさつ)を、切り抜いて貼り込んだもの。千社札と呼ぶように、納札は初め、寺社の社殿に貼る手書きや白黒の単色刷りだったが、次第に凝った意匠の色刷りや大型のものが流行り、広重など著名な浮世絵師も手がけた。

**江戸遊覧花暦 巻1-4**

岡山鳥編, 長谷川雪旦画 文政10(1827)刊 天保8(1837)印 木版

花暦とあるように、春夏秋冬にわけて植物の見頃や名所などを案内する。秋は牽牛花(あさがお)・七草・萩・月・虫・菊・紅葉。図は品川の東海寺の紅葉狩の様子で、品川宿の秋といえ、江戸市中から紅葉狩に訪れる行楽客でたいへん賑わったという。

**東京名所一写真帳一**

作者不明 明治15-36(1882-1903)頃

手のひらサイズの写真帳は、東京土産と思われる。「築地居留地」の洋館の家並みや、木造洋館2階建の国会議事堂も見える。政府機関や新橋停留場、日本銀行など中央の立派な建物に比べ、日本橋河岸や隅田川周辺の景色は、江戸情緒が色濃く残る。

**東京名所**

熊沢喜太郎画 明治27(1894) 石版

石版画で作成された名所案内。印刷技術が移り変わる中、以前の木版印刷に比べ安価で大量な印刷が可能で、写真に近い再現性を持つ石版画は、明治20年代に最盛期を迎えた。陰影が強調され独特の風情が感じられる。

### 東京めいしよ図譜 東都花容月影譜

三木貞一著，中村豊之助編 明治20（1887）

日・中・英併記で東京名所・風俗を紹介し、日本語は右開き、英語は左開きで読む構成。表紙には邦題、裏表紙には英語タイトルで「Pictorial descriptions of the famous places in Tokyo」とある。

### 4. 4 道中図

道中図とは里程、駄賃、名所旧跡、名物などをまとめた、主として江戸時代の陸海路の旅行案内用の絵図です。幕府は宿駅制度整備のため、早くから街道の測量・調査を行っており、17世紀末ごろからこれらの資料にもとづく東海道、西海路などの絵巻風の絵図が作られるようになりました。初期の大型図はもっぱら室内での鑑賞にあてられたようです。大衆の旅行熱が高まる18世紀後半になると、懐中に携帯できる小型の道中図が量産されるようになります。限られた紙面に長大な街道を描くため、沿道の景観や道路の方位を無視して路線のみを屈曲させて一枚の紙に収めるすごろく仕立ての一枚刷（『参宮道中行程細見記』ほか）や、ダイヤグラム式に直線的な表現をとるもの（『大日本道中行程細見記』ほか）など、工夫のあとがみられます。すぐれた地図作者遠近道印と浮世絵の開祖とされる菱川師宣のコンビによる大型の『東海道分間絵図』、小型の横綴本で2宿間の絵図を見開きに収めた見やすさが歓迎された『岐蘇路安見絵図』、実景のスケッチによる橋本貞秀の『海陸道中画譜』、同じ貞秀が東北地方の道路などを詳細に描いた『陸奥出羽国郡行程一覽』、大型の広域図『富士見十三州輿地全図』など、中にはいわゆる道中図の範囲をこえるものもありますが、交通路のさまざまな表現にふれることができます。

（鈴木純子）

### 東海道名所記

浅井了意 万治3（1660） 木版

江戸時代初期の道中案内記、仮名草子。江戸から京への東海道を旅しながら、土地の縁起・名所・風物・宿駅間の里数等、狂歌等を挟みながら叙述している。

### 東海道分間絵図

遠近道印 元禄3（1690） 木版

遠近道印が作成し、菱川師宣が描いた絵地図。縮尺1：12,000の実測図。街道の方向が正確であり、川・橋・家並み・宿駅に加え、人や馬が動的に描かれている。

### 難波より小倉に至る航路図

不明 延宝（1673-81）頃 手書図

摂津難波より豊前小倉までの瀬戸内海沿岸と航路を描いたもの。航路は朱書きで線描し、城主や石高等の情報も記載している。

### 伊勢道中行程記

鳥飼醉雅 寛延4（1751） 木版

縮尺：約1/50,000。道中絵図をメインとした道中記では、最も早いものである。大坂から始まり伊勢で終わっている。里数、家や山川、神社、名所旧跡などを絵にして描き、絵の上辺には旅立ちの悪い日、持ち物、潮の干満などの記載あり。

### 浦辺順覧東海路之図

不明 宝暦2（1752） 木版

東海路として松前から江戸まで、南海路として江戸から大坂までの海岸線を描く。海岸線は1本線で書き、概略的である。各地名称、里数が主な記載情報である。

### 岐蘇路安見絵図

桑楊編 宝暦2（1756） 木版

中山道の宿駅間の様子を見開き2頁で表し、見やすくしたこと、および既刊本の誤りを正し、情報を追加したと凡例にある。宿駄賃も追記している。

### 絵本伊勢路双六

備中屋彦三郎 明和6（1769） 木版

上下2冊。江戸から伊勢路經由大坂までの宿駅の出来事が絵本仕立てに、人の表情も生き生きと描かれ、双六で遊べるようになっている。

### 米沢より江戸まで道中記

不明 安永3～天明2（1774-82） 手書図

米沢上杉神社を起点にし、江戸までの街道の山川や家並みを丁寧に描きながら、流麗な筆致で土地の情報、旅の注意事項などを記載している。

### 江戸より松江まで道中絵図

不明 安永10（1781） 手書図

全長1088cm。曲尺5厘（約1.5cm）を1町（109m）として、江戸から松江までの街道の曲がりや方向を正確に描く。図中の赤い線は東西を示している。

**(東海木曾) 両道中懐宝図鑑**

不明 天保(1842) 木版

東海道を上段に中山道を下段に写し、見開き2頁に宿駅間の様子を絵にして描く。東海道は上りから、中山道は下りから順に描き、駄賃も付記している。

**奥羽道中記**

不明 享和2-文政6(1802-23) 手書図

鶴岡から江戸までの街道の山川や家並みを描き、毛筆で里数の情報を記載している。家の周りのピンク色は桜の花であろう、季節は春らしい。

**江戸より大坂まで道中絵図**

不明 文化6-8(1809-11) 手書図

江戸から大坂までの宿駅名や里数、村名、名所旧跡などが書かれ、一里塚や城は絵として描かれ、山はうっすらと彩色されている。

**日光道中絵図一日光御成道一**

平岩忠明 文政7(1824) 手書図

全4帖。日光御成街道を描いた絵図。この街道は日光街道の脇街道であり、将軍が日光東照宮へ社参する際に利用された。

**大日本道中行程細見記**

酔雅子 天保8(1837) 木版

線描の街道をダイヤグラム式に表し、北は蝦夷から南は対馬・朝鮮の一部までを含みながら日本列島を描いている。旅の持ち物や旅での注意事項、略年表なども載っていてポケット版ガイドブックになっている。初版1722年と古く、この刊まで115年続いている。

**富士見十三州輿地全図**

秋山永年(墨仙) 天保14(1843) 木版

富士山に見える13の州全域という意味。何枚も印刷された部分図を接合し、1枚の地図に仕立てたもの。富士山は上から見た平面図で描かれている。国名や道路のほか、神社や温泉、関所など重要な所は記号を付している。

**加州下道中記**

不明 嘉永4(1851) 木版

全長約380cm。縮尺1:129,600。1寸を1里とし、江戸から加賀国金沢まで下る道程を描く。紙幅4.5cmの中に山川・城・宿名を描き、馬駄賃・里数も付記する。

**自東都西国筋旅中懐宝**

結城榮(甘泉)画 嘉永5(1852) 木版

江戸より西へ肥薩および種子島・屋久島までの名山・名所を描く。情報としては、各地名称・里数が記載されている。

**行程図鑑一従東武日本橋至京都三条橋一**

橋本信正写 嘉永7(1854) 手書図

中山道と東海道の街道を上段と下段に分け、宿駅名を中心に描く。美濃路などの脇街道も記載。宿駅間の里数や村名、名所旧跡が絵にして描かれている。

**参宮上京道中一覽双六**

広重(初代)製図 安政4(1857) 木版

大判6枚を接合した道中双六図。富士山を画面中央左に配し、その周りを囲むようにして東海道を描く。四日市宿では、「長めをふれば東かいどう、半めをふればいせぢへゆくなり」と指示している。丁：偶数、半：奇数

**五海道中細見記**

大城屋良助 安政5(1858) 木版

五街道のほか、主な脇街道も記載している。山川、城、家などは絵にして描き、その他の情報は、記号を付して分かり易く説明している。

**海陸道中画譜一大坂より萩まで一**

橋本玉蘭齋 元治元(1864) 木版

鳥瞰図的な構図で、大坂より萩までの海岸線よりの海陸を描き、各地の名所を記載している。

**大日本道中細見記**

河童莽主人校正 元治元(1864) 木版 全長約247cm×幅約35cm

日本列島全土(北海道は一部のみ)を複折本の形式をとりながら描き、色刷りも装飾的である。国名・城下名・藩主・石高・宿場名などが主な情報で、その他、山名や航路なども記載されている。

**新版東海道五十三次行列双六**

玉蘭齋貞秀 慶応元(1865) 木版

間判5枚を接合し、1枚の鳥瞰図にした道中双六図。白い富士山を画面中央右に配し、街道は左右に蛇行させ、「振り出し」の江戸日本橋から大名行列が延々と描かれている。「上り」は京、泊とある宿駅では1回休み。

#### 陸奥出羽国郡行程全図

玉蘭齋製図 慶応3（1867）木版

函館と陸奥・出羽および信濃・江戸までの行程図を、8枚で接合した鳥瞰図。陣屋（城主）には江戸からの里数が記載されている。

#### 江戸より長崎まで名所旧跡道中図

不明 江戸末期 手書図

卷子本。

上巻:江戸より大坂まで宿付名所旧跡（全長約454cm）

下巻:大坂より長崎まで船道名所旧跡（全長約420cm）

#### 江戸より長崎まで道中図

不明 江戸末期 手書図

卷子本。全長約816cm。色彩は淡く、上品な仕上がりである。

#### 五街道々中絵図

不明 江戸末期 手書図

五街道および関西までの脇街道と宿駅を描く。国別に色分けしてあり、宿駅ごとの里数や関所が記載されている。山川は主だった所を絵にして描いている。

#### 4. 5 図書

*ATLAS: The Tertiary History of the Grand Canyon District* (グランドキャニオンの第三紀地図帳) ワシントン D.C.1882刊

グランドキャニオンの鳥瞰図である。第三紀とは、地質時代の時代区分の一つである。6430万年前から180万年前までをさす。

*Plan de Paris a Vol d'oiseau* (パリの鳥瞰図) 2対 1966, 1959刊

1920年から1940年にわたり G. Peltier によって製作され、描かれたオリジナル地図。

Perry, M. C. *Narrative of the expedition of an American Squadron to the China seas and Japan, performed in the years 1852, 1853, and 1854.* (ペリー提督日本遠征記) 1856刊

ペリー艦隊の東シナ海と日本に関するこの報告書は、アメリカ議会の予算で1856年に刊行され、世界中の反響を呼んだ。1854年、ペリーは黒船で2度目の来航をし、神奈川で日米和親条約を調印し、下田・函館の開港を取

りつけた。この本は、先生が米国留学先の古本屋で見つけたもの。

#### 4. 6 駅弁掛け紙とパンフレット・荷札

##### 駅弁掛け紙

田中先生は、巡検や講演、旅行、古書収集と全国各地を巡られた。弁当の掛け紙は食べたら惜しげもなく捨てられてしまうものだが、丁寧にとっておかれるところに、田中先生のお人柄がうかがえる。

札幌・盛岡・郡山・佐渡・軽井沢・高崎・大宮・赤羽・新宿・八王子・猿橋・甲府・笹子・木更津・横浜・大船・沼津・国府津・富士・浜松・静岡・名古屋・米原・京都・大阪・笠岡・岡山・多度津他

##### パンフレット・荷札

昭和26年（1951）から昭和35年（1961）の間、田中先生は国立公園審議会委員（昭和32年より自然公園審議会委員に改称）を務められた。伊豆国立公園（富士箱根伊豆国立公園）のパンフレットや、下田港黒船祭の案内状があるのはその関係と思われる。旅館の荷札にも、雲仙国立公園の富貴屋旅館、支笏洞爺国立公園の万世閣、定山溪ホテルなど国立公園内のものがある。昭和のレトロなデザインが懐かしい。

#### 4. 7 フィールドノート

##### フィールドノートについて

2010年6月、田中啓爾文庫のなかに「手帳」と記された未整理の段ボール箱が確認されました。開いてみると、大小60冊もの手帳類が無造作に押し込まれていたのです。元立正大学図書館員の大槻徳治氏（故人）は、「先生の論文や学生指導の種本ともいべきもので、後進者のために大いに参考になるが、これを公開することは果たして先生の意にそうか否か、躊躇せざるを得ない」（地域研究, p.61-66, 1975）と記していましたが、これらを取り出してみると、フィールドノート（野帳）、スケッチ帳、日記、会計簿、学校視察記録、旅行記録、人生訓などにわたり、いずれも田中先生を知る重要な資料ばかり。そのなかには、代表的著作となる『東京都新誌』（1949）や『塩および魚の移入路』（1958）のための構想記録やフィールドノートも含まれていました。幸い、これらの手帳類にはいずれも時間と場所の記載があります。先生の年譜を参考に整理が進めば、新たな視点からの田中啓爾研究に結びつくと判断し、公開することとしました。

## 文部省在外研修員

田中先生は1920（大正9）年3月4日から1923（大正12）年3月16日まで、文部省在外研究員としてアメリカ・イギリス・フランス・ドイツに留学しました。「留学日記」と題した手帳は、出国1年前の1919（大正8）3月に東京高等師範学校の加納治五郎校長より留学生として推薦する内命の記載から始まります。正式な発令は、同年10月22日と記録されています。手帳には、留学の準備、横浜出航のようす、船内生活についてはハワイ寄港後4日目まで記されています。

1年半にわたりシカゴ大学やウィスコンシン大学での授業や巡検に参加した後、田中先生はワシントンD.C.へ移動しました。「留学会計」は、1922（大正11）年2月1日ここでの記録から始まります。幣原喜重郎駐米大使（後に首相）の計らいでアメリカ議会図書館内を自由に閲覧できるようになり、1週間の滞在予定を13週間に延長して図書目録を作成し、書店に発注して日本へ送付しました。その後、4月7日ニューヨーク、4月27日ニューイングランド、5月27日イギリスへ渡ってヨーロッパ諸国を旅し、10月26日ベルリンでの記録が最後となります。この手帳は田中先生の留学生活そのものであり、その記載はバナナや卵の購入にまで及びます。いずれの都市でも多くの図書と地図類を購入しており、意欲あふれた留学生活であったことが伺えます。

## 中国（支那）旅行

1924（大正13）年（華中から内蒙古西部）、1929（昭和4）年（華南）、1939（昭和14）年（東北部から内蒙古東部）、1941（昭和16）年（華北）の四度にわたり田中先生は中国の視察旅行を行います。その成果は、後に「支那に於ける政治文化の推移に就いて」1933（昭和8）年、「中華民國（支那）の地域区分」1939（昭和14）年、「華南（南支）地誌」1940（昭和15）年などの論文として集約されます。フィールドノート「支那旅行」（一）～（六）は、1924年8月10日夜の神戸港出港から始まり、上海・南京・武漢・洛陽・北京・大同・包頭へと移動し、北京・天津を経て下関に到着後、山陰地方を経て東京に戻る記録が克明に記されています。ノートには、船から描いた陸地の様子や中国各地の集落等、多くのスケッチも残っています。

## 塩および魚の移入路

田中先生は、鉄道開通前の塩および魚の移入路に関する研究にもっとも多くの精力を注ぎました。人の生存に



写真2 フィールドノート

欠くことのできない塩と魚（とくに生魚）を指標に、港から内陸への移入路の性格を説明し、本州島の内陸度（臨海性の強弱）を帰納的に明らかにしようと試みたのです。そのヒントは、留学の時にサンフランシスコからシカゴへ向かう途中、ソルトレイクシティ（ユタ州）に宿泊し、アメリカ合衆国内陸部における塩の供給について強い関心を持ったことにあるようです。

1926（昭和元）年頃から資料収集と調査を開始し、1932（昭和7）年までには東日本一帯の河川流域や盆地の中心都市において、400人におよぶ聞き取り調査を行います。展示する4冊のフィールドノートは、1938（昭和13）年から1940（昭和15）年にかけて各地を再調査した時のものです。田中先生は、後にこうした調査を『塩および魚の移入路—鉄道開通前の内陸交通—』としてまとめ上げ、1957（昭和32）年に古今書院より出版します。この研究開始から31年、満71歳のことです。（鈴木厚志）

## 4. 8 地域構造図

地域を構成する諸要素（農業生産や商業活動等）を簡潔かつ明瞭な形で理解するために、調査者自身の論理に基づき作成する図のことを地域構造図といいます。田中先生は、自らの研究と後進の育成のために多くの地域構造図を作成し、巡検のまとめや授業で活用しました。図をもって地域を説明するこうした研究スタイルは、多くの教え子に受け継がれています。

A1、A2、A3は、東京城南地区の地域性を「地位層」の論理からまとめたもので、模造紙7枚から構成された図の一部です。A1では、田中先生自ら「地理学の最高の理念」と位置付ける地位層の構成要素を説明します。A2では、東京城南地区の地域分化をテーマとする図です。ここでは、城南地区を臨海地域・内陸地域・交通網へと区

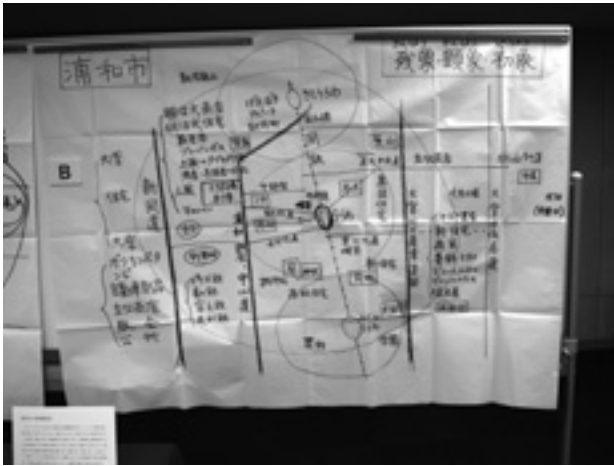


図2 浦和市の地域構造図

分し、交通網は臨海地区と内陸地区の性格を二分する地域因子として位置付けています。よく見ると、茶色で記した地理的事象は残象（過去の現象の残りのこと）を、赤字は顕象（現時点におけるもっとも顕著な現象のこと）であったと当時観察したことが推察されます。図の上部には、都心部以北との関係も表現されています。A3は、城南地区の交通網の発達を地位層の観点から整理したものです。図の下部（東海道）から上部（モノレールや高速道路等）に向い、消象→残象→顕象→初象へと層序をなし、それぞれの関係を矢印で結んでいます。

Bは、1961年2月に作成した浦和市の地域構造図であり、A1～A3と同様に地位層の理念から作図したものです。巡検のまとめとして作成したものと推察されます。この図は、国鉄（現JR）浦和駅を中心に描いており、北浦和駅と南浦和駅からもその勢力圏を示す円が緑色で描かれています。図の右上の題目にもあるように、観察に基づき交通路や地理的事象を残象（茶）・顕象（青）・初象（赤）へと色分けをして整理している点に興味を覚えます。東側の大宮・川口産業道路（現在の産業道路）や西側の新国道（現在の大宮バイパス）も整備・開通して間もない頃です。大都市東京の都市化と県都浦和の都市化との混在を整理、表現しようと苦心された跡が窺えます。（鈴木厚志）

#### 4.9 教育者としての田中先生

田中啓爾先生との出会い（抜粋）

中山 満（元琉球大学教授・故人）

……昭和36年3月、私は大学院を修了し沖縄へ帰ることになった。ある日、田中先生は、私の送別会を催すので、帝国ホテルに行くよう告げられた。送別会には、幾人かの出席があるものと予想していたが、先生と私の二

人きりであり、その御厚志に大変感激した。

席上、先生は、私に「のれんを分けてやるから、僕が今までやってきたことを、沖縄でやりなさい」といわれた。誠に身に余るお言葉であり、感激の極みであった。その後で予め準備しておられた田中先生の肖像写真（四つ切り大）と2枚の色紙が手渡された。色紙には、「地域性の把握・指標の選定・取材の巧拙・立論の一貫・総合の調和」とりあり、また「日々に 新に」と記されていた。この言葉は、今日の私の座右の銘であることに留まらず、学生への地理学研究法の講義に際しても、研究の神髄として、常に話しているところである。

（『立正地理の六十年』1985年より）

立正大学、そして田中啓爾先生のこと（抜粋）

原 明宏（元愛知教育大学教授）

……田中先生の演習の時間は新鮮で、興奮に満ちたものであった。田中先生のような超一流の地理学者と膝つき合わせて議論ができるのとは、何という贅沢だろうと思ったものである。

私が最初に日本地理学会で研究発表をしたのは、1966（昭和41）年の春であったが、私の発表をジッと聞いておられたのを思い出す。先生は自分の弟子の発表は必ず聞いておられたようである。

私は自分の専門分野に系統地理の一分野である水文学を選んだ。しかし最近地誌の意味を考えるようになってきている。それは、地理学とは何であるか、あるいは、地理学には何ができるかということを考え始めたからである。……そのような時代にあつて地理学の個性を主張するには、特定の空間の秩序を科学的に論ずる地誌こそふさわしいものと思える。このように、ともすると地誌に傾斜している自分を見るとき、田中先生の影響を知らず知らずのうちに受けているに違いないと感ずるのである。

……田中先生も、立正大学も、私の人生の分岐点で現在の方向を指し示した存在であった。

（『立正地理の六十年』1985年より）

座談会 人間地理学者としての田中啓爾先生を偲ぶ（抜粋）

大塚昌利（立正大学名誉教授）

……非常に、ジャイアンツの長嶋と、吉永小百合が好きで、よくその話を聞かされました。それから好奇心ということですと、中央高速道が開通しますと、真っ先に飛んで行ってテープを切ってみたり、一番先に道路を走ってみたという喜んでみたり、新宿に高層ビルができる

と一番先に駆けあがって自分の家を見下ろして喜んでみたり、という話が思い出されます。……私が思うには、歴史的な流れといいますか、時間の変化を取り入れたところに非常に大きな特色があって、私自身そこに共鳴いたしました。また、デービスの地形輪廻ですが、それも結局、時間の流れというものでしょう。地形変化自体そうですし、それを地域的広がりと一緒に合わせて地域と捉えたところに非常に大きな功績を感じますね。

(「地域研究」第16巻第1・2合併号、1975年より)

田中啓爾先生と地誌(抜粋)

稲永幸男(立正大学名誉教授・故人)

先生はよくいわれた。国土地理院の地形図をどこでも一枚とり出し、図幅名をかくしておいて本もなにも見ないで1時間、地図に書いてあることを説明できなければ一人前ではないと読図の訓練をすることを強く希望された。

読図訓練の方法は、地図を持って同じ場所を巡検することだといわれた。地図に画いてあるものと実際の現象が一致するまで繰り返し自己訓練する。そうすると読図力がついてくる。

地図化をすることと、地図の読図とは一体のものでそれが円満に調和されるには巡検がすべてである。この三つは基本である。地誌の研究も、地理教育もこれを忘れたら駄目だと教えられた。

(『初公開 立正大学田中啓爾文庫 古地図・浮世絵にみる開港名品展』1987年より)

## 5. おわりに

この度の7日間にわたる展示には600名を越える方々の来場があった。その内、学外者は約半数、埼玉県外からの来場者も80名を越え、予想を超えて広い範囲から来場者があったことになる。これは、埼玉県内の市町村広報誌に案内を依頼したことが強く影響している。また、展示会場では275名もの来場者がアンケート記入に協力してくださった。展示内容についての満足度や展示解説のわかりやすさについては高い評価を頂いた。これは、本稿の分担執筆者らが展示期間中に展示室に常駐し、適宜解説を行ったことによるものと推察される。

わが国において個人の研究者が収集した古地図や絵図のコレクションとしては、立正大学の田中啓爾文庫のほか、明治大学の蘆田伊人文庫や中村 拓文庫、神戸市立博物館の秋岡コレクションや南波コレクションなどがある。

これらを所蔵する側には、単に目録作成にとどまらず、収集した本人の意志とコレクションの価値を後世に引き継ぐ体制の確保が何よりも必要である。デジタル形式によるアーカイブ化や公開も一つの方法であろう。こうした作業と並行し、図書館関係者や研究者や市民により構成する開かれた研究会等の組織化とそれによる研究の蓄積も必要である。

他方、教育・研究組織側には、所有する文庫を単なる知的財産としての価値判断で収束するのではなく、'知識の生産過程'を知る優れた研究史資料であり教材であるとの認識とその活用が何より求められる。個人に対する単なる陶醉や盲従ではなく、冷静にその研究法や研究成果を検証し、進展・拡充する意志と実行力が必要である。今回の展示では、田中啓爾先生の研究・教育活動を約40年にわたり支えてこられた故柘田一二元立正大学教授については全く触れることはできなかった。田中先生の全貌に迫ろうとする時、その講義や巡検などの準備と補助そして学生指導を補佐された柘田先生の存在はきわめて大きいものがある。次なる機会にはぜひ実現させたいと思う。

最後に、この度の特別展「古地図・絵図 田中啓爾コレクションの世界」のきっかけを作った下さった中村和郎駒澤大学名誉教授と堀 信行奈良大学教授をはじめとする地理学サロンの構成員、またこうした特別展の企画とその開催に理解を頂いた立正大学情報メディアセンター、そしてご多用にもかかわらず図録原稿の執筆と講演をご快諾いただいた正井泰夫立正大学名誉教授、見学会の折にご説明頂いた清水靖夫元立教高校教諭に心より御礼申し上げる。

## 引用文献

- 太田美術館(1987):『初公開 立正大学田中啓爾文庫 古地図・浮世絵にみる開港名品展』80p.  
 岡田俊裕(2011):『日本地理学人物事典[近代編1]』461p.  
 田中啓爾(1933):『地理学論文集』古今書院,  
 田中啓爾(1957):『塩および魚の移入路』古今書院, 315p.  
 田中啓爾(1965):『第三地理学論文集』田中啓爾先生謝恩記念会, 774p.  
 田中啓爾(1975):『第四地理学論文集』古今書院, 619p.  
 田村百代(1984):『田中啓爾と日本近代地誌学—欧米地誌学との関連—』古今書院, 173p.  
 山口貞夫(1975):『地理学発達史上における田中先生, 地域研究 16-1・2:2-6.  
 立正大学地理学教室創立60周年記念会沿革誌刊行小委員会編(1985):『立正地理の六十年—立正大学地理学教室・立正地理学会—』198p.  
 立正大学図書館(1983):『田中啓爾文庫目録 第一巻 和書の

部』323p.

立正大学図書館（1986）：『田中啓爾文庫目録 第三巻 地図の部』272p.

## The Special Exhibition Records about Old and Illustrated Maps of the Dr. TANAKA Keiji Collection of the Rissho University Kumagaya Library Possession

SUZUKI Atsushi \*, SUZUKI Junko \*\*, YAMAZAKI Hideo \*\*\*  
NEGISHI Mariko \*\*\*, KIKUMA Yoko \*\*\*, TANAKA Noriko \*\*\*

\* Faculty of Geo-environmental Science, Rissho University

\*\* A Former National Diet Library Librarian

\*\*\* Rissho University Kumagaya Library Librarian

### Abstract:

From November 4, 2011 through 10th, in the Rissho University Kumagaya Library held in titled “Special Exhibition: Old and Illustrated Maps of the Dr. TANAKA Keiji Collection”. This paper recorded the summary of the special exhibition, an exhibition list and commentary sentence. In Japan, there are several map collections which researcher collected. The research organization possessing a map collection should maintain the system to succeed the value in the next generation. On the other hand, faculties and staff usually utilize collection for education and should work hard to raise value of the collection.